

## 新「地縁」コミュニティを生みだす街

### 港北ニュータウン

なかなか上がらなかった入居率

港北ニュータウンは、港北区と緑区にまたがる、2500haにもおよぶ地域である。

横浜市が構想をうち出したのが昭和40年、その後、18年もの歳月をへて、58年夏、ようやく集合住宅へ第1次の入居が始まった。

当初は、人気があつたつもりであつたが、低い入居率が話題になった。最大の理由は、「陸の孤島」とよばれる交通の便の悪さにあつた。それでも第1陣として荏田南地区の「しいの木台ハイツ」、続いて「けやきが丘」「みずきが丘」、そして「かしの木台ハイツ」で新しい生活がスタートした。

人が住み始めると、単なるコンクリートのかたまりにすぎなかつた建物や道路などにも魂があたえられる。「30万都市」をめざす港北ニュータウンは、問題をかかえながらも「街」として歩み始めたのだ。

始まりは「夏祭り」から

昭和60年夏、荏田南小学校校庭で、第1回「荏田南夏祭り」が開催された。すべて住民手づくりのこの祭りをきっかけに、それまで自治会のなかつた地区に自治会が誕生した。また、荏田南小学校区を中心にして、PTAや地域活動がさかんになり出した。横浜市では、小・中学校

を地域に開放しようという方針がある。これを活用しようと、PTAにコーラス部ができて、積極的に活動を始めた。

それから少し後にできたのが「まちの教室」。女子大生が、港北ニュータウンのコミュニティ形成をあつかったレポートを発表したときに集まった人たちの交流集会を開いたのが始まりだ。「まちの教室」とは面白いネーミングだが、コンサート、演劇などを自分たちの手でひらきながら、「いい仲間たち」のネットワークを広げ、「魅力あるまち」をつくらうというのが大きなテーマとなっている。

こうした活動が土台となって、地域の人びとの輪が広がり、結びつきが強まって行つた。そうして昭和62年春に、荏田南小学校区地域連絡会が誕生した。荏田南小学校区内の7つの自治会・町内会と2つのPTAが手を取りあつてきたものだ。

特にユニークなものは、この会の広報誌である「フラミンゴ」。62年6月発行の創刊準備号に始まり、隔月に発行されている。いちおう、この会の広報という形をとっているが、たんなる広報誌の枠をこえ、地域の情報を伝え、周辺地域の情報をとり入れ、さらに、周辺地域にこの地域の情報を発信するという、ミニコミ誌になっているのである。もちろん編集は、すべて地域住民が行っている。

『フラミンゴ』を媒体にして、新田住民が一

緒になって、少しでもよいまちづくりをしていなければならないというのが、編集にたずさわっている人たちの思いである。それだけに、まちの単なる情報記事だけでなく、荏田地区の歴史や、さらに横浜都心部の紹介記事にも工夫が凝らされており、読者の目をむけさせたいという熱意が伝わってくるような紙面である。

「フラミンゴ」というネーミングは、荏田南小学校の校舎の壁が「フラミンゴピンク」という色であることからつけられたとのことだ。小学校が地域のシンボルであるのなら、このミニコミ誌も地域のシンボルの一つとなっていくとだろう。

### 新「地縁」社会

そのほかにも、この地区ではさまざまな活動が行われている。

「鴨池公園愛護会」は、公園というものを自分たちの生活空間の一部にしよう、ほたるの里づくり、竹林の手入れ、野草保護などを行つている。「しいのみ会」は近くに保育園がないため、自分たちで保育をしようとした自主保育グループ。その後輩格に当たる「ちびっ子広場」。このほかにも、自治会・町内会をふくめ、さまざまなグループが活動している。

58年に第1陣として入居した人びとは、文字どおり手探りでさまざまな活動を行ってきた。町内会・自治会もPTAという組織もなく、保育園やほかの公共施設もないなかで、いわば必

■港北ニュータウン第1地区集合住宅地周辺の人口

		昭和58年	昭和59年	昭和60年	昭和61年	昭和62年
丸山台	28	68	88	559	1,430	
大見花	80	287	478	750	1,022	
平谷	—	—	249	300	378	
富士が丘	—	—	—	429	1,076	
荏田東1	—	—	—	136	304	
2	—	—	—	—	110	
3	390	931	1,175	1,456	2,078	
4	—	—	—	—	251	
荏田南1	700	1,675	1,985	2,395	2,491	
2	12	95	260	335	462	
3	155	284	415	514	667	
4	—	—	—	—	257	
5	77	304	604	1,165	1,844	

横浜市「横浜市町別世帯と人口」

要に迫られて、皆が協力しあうという土壌が生まれ、またとも言えるだろう。荏田南小学校初代PTA会長で、「まちの教室」にも深くかかわってきた山田美千子さんは、「初めの頃は、人数も少なかったし、何もない状態だったから、まとまりはよかった」と当時をふりかえる。

しかし、たんに必要にせまられて生まれたというだけでは、片づけられない何かがあったことも確かである。先に入居した人びとのまちづくりにたいする積極的な姿勢が、後から入居した人びと、さらに、元から住んでいた人びとも巻きこんでいる。

できあがった環境を自分たちのカラーで染めて気持ちのよいものになろうという意識、よい



港北ニュータウンでのコミュニティ活動

まちづくりは人と人との良い関係から生まれるという意識が、この地域の人びとには感じられる。しかしながら、そこには重苦しい義務感や押しつけはない。

「まちの教室」のモットーは、「ネットワークを目的とする」「自分たちがこの町で輝こう」「負担を感じないでいて、自分のできる範囲でやろう」という3点である。このモットーは、そのまま、ほかのまちづくりにも引き継がれているのかもしれない。

その楽しくやろうという雰囲気は、まちづくりに男性をも巻きこんでいる。「このまちづくりの特徴は、男性が大いに協力してくれているということ。表面にはあらわれないことも多



港北ニュータウン集合住宅

いけれど、陰にある男性の力なしではやっていけません」と山田さん。

何もないところに住宅ができ、自分たちの手で楽しくやろうと始められたまちづくり。地縁的「コミュニティ」ではあるが、土地のしがらみにとらわれているようなところはまったくない。むしろ、知り合い同士で楽しくやっというふうな「知縁的」コミュニティができていく。

周囲とは隔絶されたまちななかで、30〜40歳代、比較的高収入・高学歴という同じような人びとによって形づくられている新しいコミュニティは、これからも新しい話題を提供し続けることだろう。